萱草に寄す

立原道造

SONATINE

No.1

はじめてのものに

ささやかな地異は　そのかたみに
灰を降らした　この村に　ひとしきり
灰はかなしい追憶のやうに　音立てて
樹木の梢に　家々の屋根に　降りしきつた

その夜　月は明かつたが　私はひとと
窓に凭れて語りあつた（その窓からは山の姿が見えた）
部屋の隅々に　峡谷のやうに　光と

よくひびく笑ひ声が溢れてゐた

――人の心を知ることは……人の心とは……
私は　そのひとが蛾を追ふ手つきを　あれは蛾を
把へようとするのだらうか　何かいぶかしかつた

いかな日にみねに灰の煙の立ち初めたか
火の山の物語と……また幾夜さかは　果して夢に
その夜習つたエリーザベトの物語を織つた

またある夜に

私らはたたずむであらう　霧のなかに
霧は山の沖にながれ　月のおもを
投箭のやうにかすめ　私らをつつむであらう
灰の帷のやうに

私らは別れるであらう　知ることもなしに
知られることもなく　あの出会つた
雲のやうに　私らは忘れるであらう

水脈のやうに

その道は銀の道　私らは行くであらう
ひとりはなれ……（ひとりはひとりを
夕ぐれになぜ待つことをおぼえたか）

私らは二たび逢はぬであらう　昔おもふ
月のかがみはあのよるをうつしてゐると
私らはただそれをくりかへすであらう

晩（おそ）き日の夕べに

大きな大きなめぐりが用意されてゐるが
だれにもそれとは気づかれない
空にも　雲にも　うつろふ花らにも
もう心はひかれ誘はれなくなつた

夕やみの淡い色に身を沈めても
それがこころよさとはもう言はない
啼いてすぎる小鳥の一日も

とほい物語と唄を教へるばかり

しるべもなくて来た道に
道のほとりに　なにをならつて
私らは立ちつくすのであらう

私らの夢はどこにめぐるのであらう
ひそかに　しかしいたいたしく
その日も　あの日も賢いしづかさに？

わかれる昼に

ゆさぶれ　青い梢を
もぎとれ　青い木の実を
ひとよ　昼はとほく澄みわたるので
私のかへつて行く故里が　どこかにとほくあるやうだ

何もみな　うつとりと今は親切にしてくれる
追憶よりも淡く　すこしもちがはない静かさで
単調な　浮雲と風のもつれあひも

きのふの私のうたつてゐたままに

弱い心を　投げあげろ
噛みすてた青くさい核(たね)を放るやうに
ゆさぶれ　ゆさぶれ

ひとよ
いろいろなものがやさしく見いるので
唇を噛んで　私は憤ることが出来ないやうだ

のちのおもひに

夢はいつもかへつて行つた　山の麓のさびしい村に
水引草に風が立ち
草ひばりのうたひやまない
しづまりかへつた午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり　火山は眠つてゐた
――そして私は
見て来たものを　島々を　波を　岬を　日光月光を

だれもきいてゐないと知りながら　語りつづけた……

夢は　そのさきには　もうゆかない
なにもかも　忘れ果てようとおもひ
忘れつくしたことさへ　忘れてしまつたときには

夢は　真冬の追憶のうちに凍るであらう
そして　それは戸をあけて　寂寥のなかに
星くづにてらされた道を過ぎ去るであらう

夏花の歌

その一

空と牧場のあひだから　ひとつの雲が湧きおこり
小川の水面に　かげをおとす
水の底には　ひとつの魚が
身をくねらせて　日に光る

それはあの日の夏のこと！
いつの日にか　もう返らない夢のひととき
黙つた僕らは　足に藻草をからませて
ふたつの影を　ずるさうにながれにまかせ揺らせてゐ

た

……小川の水のせせらぎは
けふもあの日とかはらずに
風にさやさや　ささやいてゐる

あの日のをとめのほほゑみは
なぜだか　僕は知らないけれど
しかし　かたくつめたく　横顔ばかり

その二

あの日たち　羊飼ひと娘のやうに
たのしくばつかり過ぎつつあつた
何のかはつた出来事もなしに
何のあたらしい悔ゐもなしに

あの日たち　とけない謎のやうな
ほほゑみが　かはらぬ愛を誓つてゐた
薊の花やゆふすげにいりまじり
稚い　いい夢がゐた――いつのことか！

どうぞ　もう一度　帰つておくれ
青い雲のながれてゐた日
あの昼の星のちらついてゐた日……

あの日たち　あの日たち　帰つておくれ
僕は　大きくなつた　溢れるまでに
僕は　かなしみ顫へてゐる

SONATINE

No.2

虹とひとと

雨あがりのしづかな風がそよいでゐた　あのとき
叢は露の雫にまだ濡れて　蜘蛛の念珠（おじゆず）も光つてゐた
東の空には　ゆるやかな虹がかかつてゐた
僕らはだまつて立つてゐた　黙つて！

ああ何もかもあのままだ　おまへはそのとき
僕を見上げてゐた　僕には何もすることがなかつたか
ら

（僕はおまへを愛してゐたのに）
（おまへは僕を愛してゐたのに）

また風が吹いてゐる　また雲がながれてゐる
明るい青い暑い空に　何のかはりもなかつたやうに
小鳥のうたがひびいてゐる　花のいろがにほつてゐる

おまへの睫毛にも　ちひさな虹が憩んでゐることだらう
（しかしおまへはもう僕を愛してゐない
僕はもうおまへを愛してゐない）

夏の弔ひ

逝いた私の時たちが
私の心を金(きん)にした　傷つかぬやう傷は早く愎るやうに
と
昨日と明日との間には
ふかい紺青の溝がひかれて過ぎてゐる
投げて捨てたのは
涙のしみの目立つ小さい紙のきれはしだつた

泡立つ白い波のなかに　或る夕べ
何もがすべて消えてしまつた！　筋書どほりに

それから　私は旅人になり　いくつも過ぎた
月の光にてらされた岬々の村々を
暑い　涸いた野を

おぼえてゐたら！　私はもう一度かへりたい
どこか？　あの場所へ（あの記憶がある
私が待ち　それを　しづかに諦めた――）

忘れてしまつて

深い秋が訪れた！（春を含んで）
湖は陽にかがやいて光つてゐる
鳥はひろいひろい空を飛びながら
色どりのきれいな山の腹を峡の方に行く

葡萄も無花果も豊かに熟れた
もう穀物の収穫ははじまつてゐる
雲がひとつふたつながれて行くのは

草の上に眺めながら寝そべつてゐよう
私は　ひとりに　とりのこされた！
私の眼はもう凋落を見るにはあまりに明るい
しかしその眼は時の祝祭に耐へないちひささ！

このままで　暖かな冬がめぐらう
風が木の葉を播き散らす日にも――私は信じる
静かな音楽にかなふ和やかさだけで　と

底本：「立原道造全集　第1巻　詩集I」角川書店
　　1971（昭和46）年6月20日初版発行
底本の親本：「萱草に寄す」風信子叢書刊行会（自費出版）
　　1937（昭和12）年5月12日
初出：「萱草に寄す」風信子叢書刊行会（自費出版）
　　1937（昭和12）年5月12日
※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記を新字旧仮名にあらためました。
入力：八巻美恵

１９９７年9月11日公開
２００５年11月10日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。